

都留市史

資料編 地史・考古

其の一

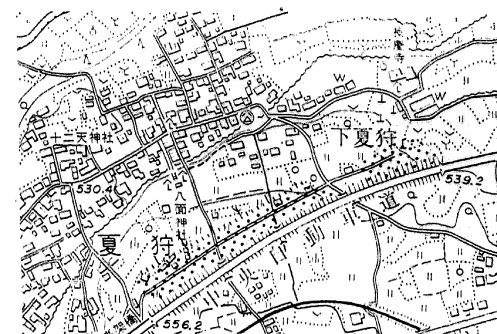
7 山梨原遺跡

都留市夏狩字山梨原

遺跡の立地

遺跡は、都留市夏狩字山梨原に所在し、富士山から流出した溶岩台地上及びその末端に立地する。この溶岩台地の末端である遺跡の北側には、豊富な湧水が湧き出ている。

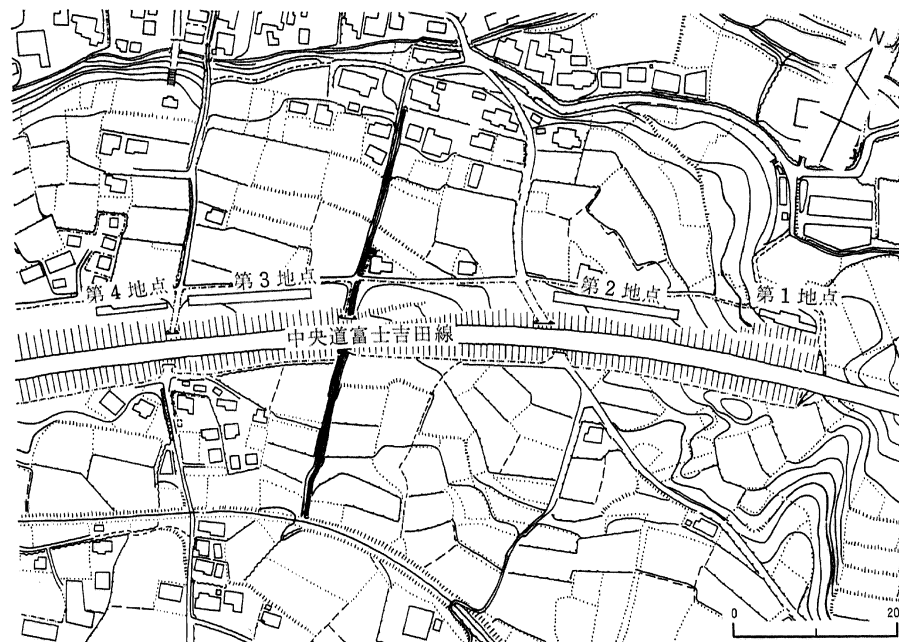
遺跡の周辺には、南西側約3kmの溶岩台地上に立地する、縄文時代後・晩期の鹿留久保遺跡があり、また、溶岩台地末端部周辺では湧水及び湧水から流出する小川沿いに、縄文時代前期を主体とする馬々舟遺跡などが立地する。



第1図 遺跡の位置

遺跡の調査

調査は、中央自動車道富士吉田線の四車線化工事に伴う緊急調査として、昭和54年12月14日から昭



第2図 遺跡の地形と調査地点

和55年3月5日まで、延べ38日間にわたって実施した。

調査は、その対象区域が、東西300m、南北10mと細長く、また、区域内は道路によって四つに分断されるなどしているために、第2図のように第1～4地区と地区割りをして地区ごとに調査を進めることにした。

調査の結果、第1地点では縄文時代の住居址4軒、土壇9基、集石1基、礫群、小さなピットが、第2～4地点では、平安時代及び中世以降と思われる土壇13基・溝状遺構45基が検出された。

遺跡の層位

本遺跡の標準層序は、ほぼ15層に分かれた。

第Ⅰ層（表土層）工事用道路建設時に敷かれたと思われる瓦礫混じりの土層である。

第Ⅱ層（暗褐色土層）工事用道路建設前の表土層（耕作土）と思われる。

第Ⅲ層（黒褐色土層）赤色粒子、2mm大のスコリアを若干含有。粘性は強い土層である。

第Ⅳ層（黄褐色土層）黄褐色土。スコリアを多量に含有し、全体的に砂粒状を呈する。

第Ⅴ層（暗褐色土層）2～3mm大の大粒のスコリア若干含有し、全体的に粘性はなく細かな砂粒状の土層である。本層は黒色火山灰層を主として形成されているものである。

第Ⅵ層（暗茶褐色土層）1～3mm大の灰色スコリアを多量に含有した土層である。

第Ⅶ層（褐色土層）1～2mm大の黄褐色スコリアを多量に含有した土層である。

第Ⅷ層（茶褐色土層）1～3mm大の大粒の赤褐色粒子を若干含有し、10～30cm大の熔岩礫が若干混入する。

第Ⅸ層（ローム漸移層）

第Ⅹ層（ローム層）褐色土を若干混入した黄褐色土、粘性はやや強くスコリアを含有する。

第Ⅺ層（スコリア層）橙色、赤色スコリアによって構成された土層である。

第Ⅻ層（ローム層）明赤褐色土層。赤色粒子を若干含有。

第Ⅼ層（ローム層）明赤褐色土層。スコリア・赤色粒子を若干含有し、粒子は第12層に比して細かい。

第Ⅽ層（ローム層）赤褐色土層。粘性は強く赤色スコリアをかなり含有、同層下部はスコリアの純層に近いものとなっている。

第Ⅾ層（泥流堆積層）熔岩礫・スコリア・赤褐色土が混在し、非常に固く凝固しているかのような土層である。

これら15層に分かれた土層について、包含されている遺物との関係を見ると、第Ⅴ層で縄文時代後期初頭の堀之内1式土器、第Ⅶ層では同時代前期の諸磯B・C式土器・十三善提式、同時代中期の五領ヶ台式土器・藤内1式土器、第Ⅷ層では上部から諸磯B・C式土器・十三善提式・藤内1式土器、下部から同時代早期初頭の押型文土器・捺糸文土器、第Ⅷ層では捺糸文土器が、それぞれ出土した。

次に、土層と遺構の関係をみると、第Ⅲ層（第2～4地点）及び第Ⅳ層（第1地点）が溝状遺構・土壇の検出面となり、第Ⅱ層及び第Ⅲ層がその覆土となっている。

第1地点で検出された縄文時代の遺構の検出面は、第Ⅴ層（第8号址）、第Ⅶ層（第1・3～7・

9・13号址）、第Ⅶ層（第11号址）であった。

第1地点発見の遺構と遺物

第1地点は、本遺構の最も東側で溶岩台地（十日市場溶岩）の縁辺部に位置する。この溶岩台地の縁辺部には各所で湧水が認められる。本地点北側にも豊富な湧水地が認められる。

本地点では、第3図のように調査区を設定し、調査にあたった。調査区西側（12～17区）は十日市場溶岩が堆積しているために調査は不可能であった。

遺構

本地点では、縄文時代の遺構として住居址4軒・土壇9基・集石1基・礫群・小ピットなどが検出された。

これらのうち、1・2号住居址は調査対象区域外に広がっていたために完掘できなかったが、プランは円形を呈するもの（1・3・4号住居址）、隅丸方形を呈するもの（第2号住居址）が認められ、また土壇はほとんどが円形で底の平らなタライ状を呈するものであった。

第1号住居址

住居址の北側半分以上は、調査対象地区外に広がり、また、壁の立ち上がりが明確につかめなかったために、形態・規模について不明瞭であるが、柱穴の配列などから推測すると、住居址は直径約4.7mの円形プランを呈するものと思われる。

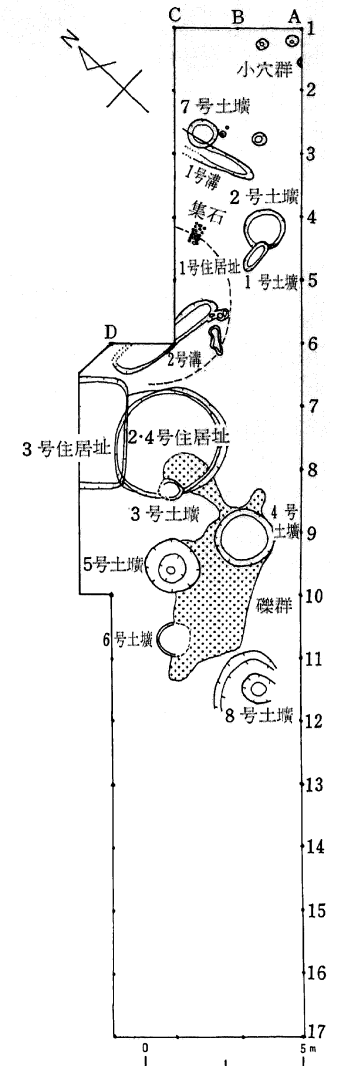
出土遺物は、縄文時代後期堀之内1式土器の小破片が若干出土したのみであった。

第2号住居址

北側を第3号住居址によって切られているが、直径約3.5mのほぼ円形プランを呈するものと思われる。壁高は東壁で12cmを測り、床面は平坦であるが軟弱であった。柱穴は5本検出され、P1・3・4・5は深さ50～60cmを測り、主柱穴と考えられる。

第3号住居址

住居址の大半が調査対象地区域外に広がっているために、全貌は知り得ないが、一辺約3.3m程度の隅丸方形を呈するものと思われる。壁は緩やかに立ち上がり、西壁で約7cmを測り、床面は平坦で軟弱であった。



第3図 第1地点全体図

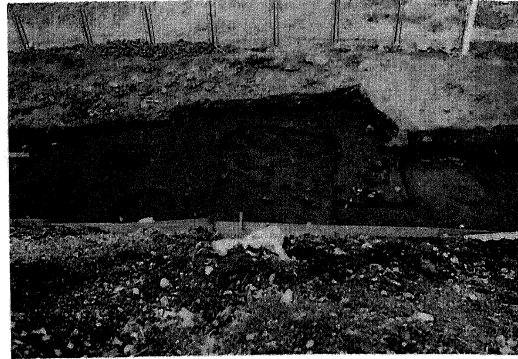
考 古

出土遺物は、床面及び覆土より縄文時代中期藤内1式土器片及び磨石が出土した。

第4号住居址

住居址は、第2号住居址の下から発見され、第3号住居址に北側を切られていた。

形態は不整形円形プランを呈するものと思われ、規模は約3.7m×約3.3m、壁は垂直ぎみに立ち上がり、西壁で約40cmを測る。柱穴は14本検出された。



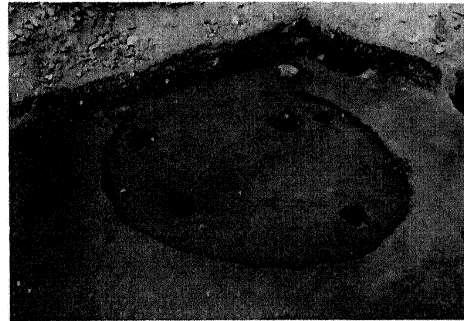
第4図 第1地点発見の遺構全景

床面は平坦で硬くしまっていた。炉址は床面を掘り込んだ地床炉で、住居中央よりやや北側に偏置されていた。炉は約55cm×60cmの規模を有し、円形プランを呈し、深さ12cmを測る。

出土遺物は、縄文時代前期諸磯b式土器片が覆土中より出土した。

第1号土壇

第VI層上面より第2号土壇を切って、構築されている。形態は長楕円を呈し、規模は長軸117cm×短軸56cm、深さは確認面より-23cmを測る。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は二つに細分され、第1層はスコリア層、2層は1~3mm大のスコリア、赤褐色粒を含有した黒褐色土である。出土遺物なし。



第5図 第2・3号住居址

第2号土壇

第VI層上面より構築されており、西壁の一部を第1号土壇によって切られている。

形態は円形を呈し、規模は直径約140cm深さは確認面より-37cmを測る。床面は平坦で、軟弱であった。壁は垂直ぎみに立ち上がる。覆土は二つに細分され、第1層は赤褐色粒、カーボン粒を含有した粘性の強い暗褐色土。2層は1層と同様の含有物を含む粘性の強い茶褐色土。遺物は打製石斧・磨石などが出土した。



第6図 第4号住居址

第3号土壇

第2号住居址の覆土を切って構築しており、北側半分は検出できなかった。形態はほぼ円形を呈す

るものと推定される。規模は東西方向で94cm、深さは確認面より-15cmを測る。床面は平坦で軟弱である。壁は西側で垂直ぎみに立ち上がり、東側では緩やかに立ち上がる。覆土は二つに細分され、第1層は粘性が弱く、赤褐色粒、黄褐色粒、カーボン粒、3~4mm大のスコリアを含有した褐色土。2層は粘性が強く、赤褐色粒、黄褐色粒を含有した茶褐色土である。出土遺物なし。

第4号土壇

第VI層上面より構築されており、形態は円形を呈している。規模は長軸186cm×短軸165cm、深さは確認面より-15cmを測る。床面は平坦でしまっており、南隅には44cm×35cm×37cmの三角形を呈する扁平な石が置かれた状態で出土した。この石は上面は磨り減っており、凹状を呈している。おそらく砥石のような役割をはたしたものと推察される。覆土は赤褐色粒、カーボン粒を含有した茶褐色土。出土遺物は縄文時代前期諸磯B式土器片が認められた。

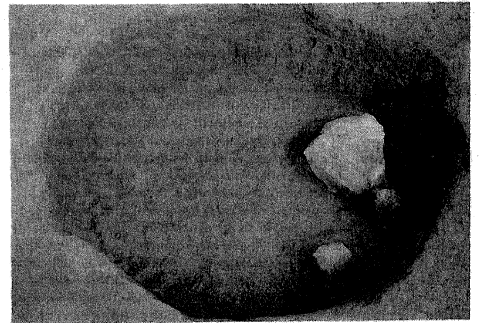
第5号土壇

第VI層上面より構築されており、形態はほぼ円形を呈し、上面から底面に移行するに従い、つぼまりを増す“漏斗状”を呈している。規模は長軸187cm×短軸178cm、深さは確認面から-96cmを測る。

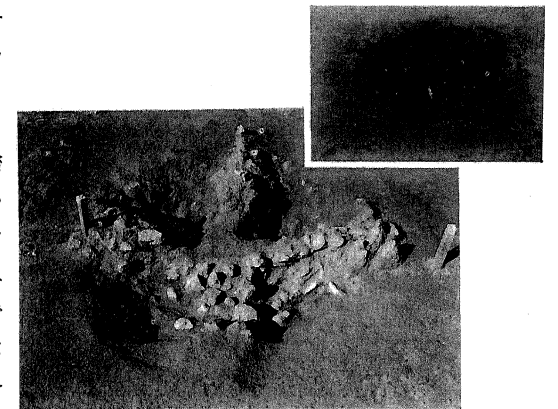
覆土上部には5~15cm大の熔岩礫が密集した集石を伴っており、深さ-30cmのレベルでカーボンが約10cmの厚さでレンズ状に堆積し、また、深さ-65cmの所に45cm×50cmの扁平な礫が置かれた状態で検出された。底面付近にはとくにカーボンの集中が見られた。覆土は三つに細分され、第1層は黄褐色スコリアを多量に含有した黄褐色土。2層は多量のカーボンと少量の焼土粒、2~3mm大のスコリアを含有した褐色土。3層は、多量のカーボン少量の焼土粒



第7図 第1・2土壇



第8図 第4号土壇



第9図 第5号土壇

考 古

を含有した黒褐色土である。出土遺物は時期不明の縄文土器の小破片が出土した。

第6号土墳

第Ⅵ層上面より構築されており、南側半分は覆土の判別が困難で明確に検出できなかった。形態は円形を呈するものと思われ、覆土上部に集石が形成されている。規模は東西方向105cm。深さは確認面より-15cmを測る。床面は平坦で軟弱である。壁は垂直ぎみに立ち上がる。覆土はカーボン粒、焼土粒を含有した褐色土。出土遺物は縄文時代早期末葉の茅山式土器の小破片が若干出土した。

第7号土墳

第Ⅶ層上面から掘り込まれ、ローム層を切って構築されている。形態は円形を呈しており、規模は直径約100cmで、深さは確認面より-36cmを測る。床面は平坦でしまっており、壁は垂直ぎみに立ち上がる。覆土は黒褐色土。出土遺物なし。

第8号土墳

第Ⅸ層上面で確認されたもので、南・西側は調査区域外のため全容は不明であるが、形態はおよそ円形を呈するものと思われる。底面を見るとなだらかに落ち込んだ後、中央付近がさらに深く掘り込まれていて、そこに暗褐色土に包まれるかのようにローム塊が認められる。規模は直径約240cm程度と推定され、深さは確認面から-52cmを測る。

礫群・集石

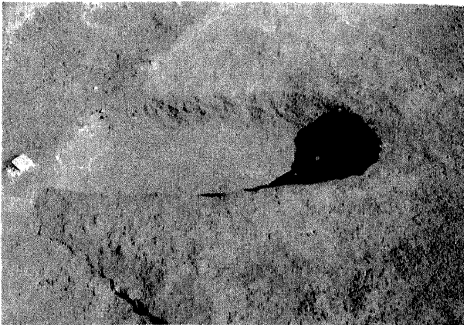
第Ⅵ層上面において、第10図のように拳大の溶岩礫が同一レベルで密集した状態で検出された。礫の分布状況から調査区の北側にまで広がるものと思われる。この礫に混じって、縄文時代前期諸磯B式土器片が出土した。

第1号溝状遺構

A・B-2・3グリッドに位置する。第Ⅲ層上面より構築されており、主軸は南北方向である。規模は北側が調査区域外のため全容は不明であるが、幅64cm、深さは確認面より-56cmを測る。覆土は茶褐色土。出土遺物は時期不明の縄文式土器の小破片がわずかに出土したのみであった。



第10図 第Ⅵ層中の礫群



第11図 第1号溝状遺構



第12図 第2号溝状遺構

第2号溝状遺構

B-5、C-6グリッドに位置する。第Ⅲ層上面より構築されており、主軸は東西方向である。西壁の一部が調査区域外にかかっている。規模は長さ376cm×幅70cm、深さは確認面より-34cmを測る。

覆土は茶褐色土。出土遺物なし。

遺 物

(1) 土 器

本地点からは、縄文時代早期～同時代後期までの土器が認められた。これらは時期別に大別すると7群に類別され、さらに各群の土器は形態・文様などにより細別される。

第1群土器(第16図-1～3)

縄文時代早期前半に属する土器で、小破片が数片出土したのみであった。これらのうち、1は縄文(RL)が施文された斜縄文系土器の尖底部であり、2・3は前者が山形、後者が楕円の押型文土器片である。

第2群土器(第13図)

縄文時代早期前半に属する土器で、第13図の土器は表裏面に貝殻条痕が施文された土器で、口唇部に刻みがつけられ、口唇部直下には横位に、胴上半から下半にかけては縦位に、それぞれ条痕文が施されている。

第3群土器

縄文時代前期後葉諸磯式に比定されるもので、文様により4類に分類される。

第1類(第14図-1・2・第16・17図-5～29)連続爪形状刺突文が施されたものである。

第2類(第17図-30～34)刻み入りの浮線文が施された土器群である。

第3類(第17図-35)縄文のみのものである。

第4類(第17図-36・37)集合条線が施されたもので、36はボタン状の貼付文が施されている。

これらのうち、第1～3類は諸磯b式に、第4類は諸磯c式に、それぞれ比定される。

第4群土器

縄文時代前期末葉十三菩提式に比定されるもので、文様により2類に分類される。

第1類(第17図-38～40)やや幅の広い貼付文が施されたものである。

第2類(第17・18図-41～45)結節浮線文が施されたものである。

第5群土器(第18図-54・55)

縄文時代中期初頭五領ヶ台式土器に比定されるもので、54は集合浮線文が、55は結節縄文が、それぞれ施されている。

第6群土器(第18図-46～53)

縄文時代中期中葉藤内1式土器に比定されるもので、46～48は口唇部直下に刻み入りの隆帯が施され、50～53は同じく細かい刻みをもつ隆帯と、半截竹管による区画文、及び結節沈線文が施されている。

考古

第7群土器

縄文時代後期堀之内1式土器に比定されるもので、これらのうち、第14・15図一3～7、第18・19図一57～71は口縁部破片で、太い沈線文と刻み入りの隆線、太い沈線文、刻み入りの隆線がそれぞれ口唇部直下に施され、また、小突起が付けられたものが認められる。胴部は棒状施文具による沈線文が施され、沈線文間に縄文・刺突文が施されたものも認められる。

以上、本地点出土の縄文式土器を7群に大別して概観した。本地点では縄文時代早期～同時代後期までの土器が認められたが、各時期とも1～2型式程度の断片的な出土であり、量的にもとくにまとまりは認められなかった。

(2) 土製品

土器片錘(第21図一1)

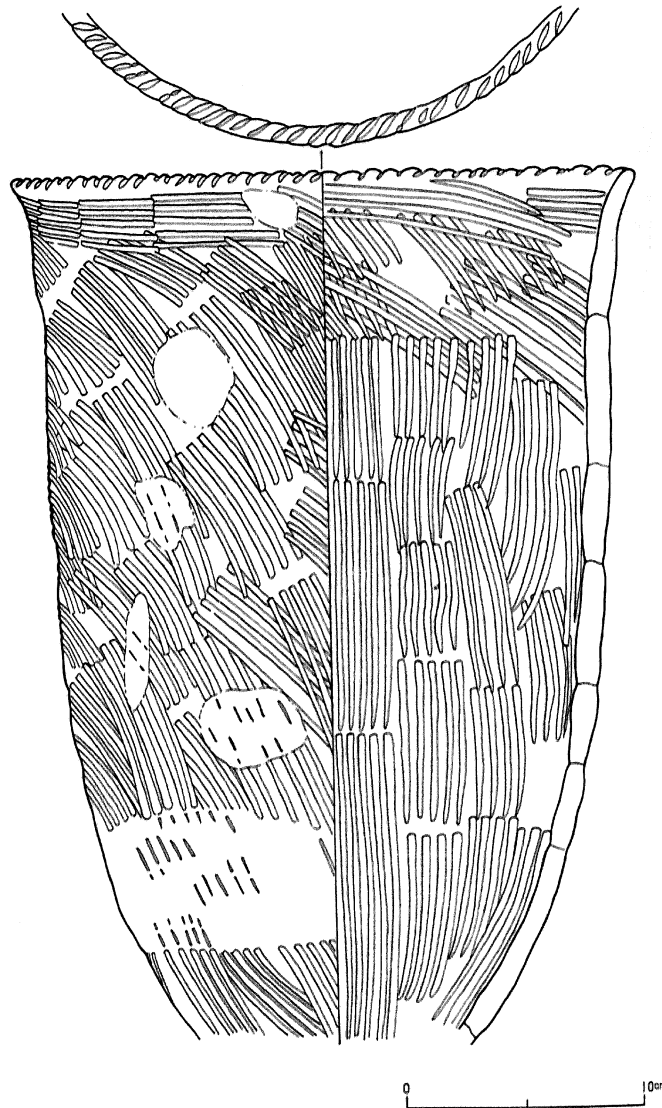
小形なもので、側縁を整形しており、左右には切目が施される。縄文時代後期堀之内式の土器片を利用してつくられたものである。

土製円盤(第21図一2～4)

土器片の側縁を磨いて整形したもので、2は不整形、3は円形、4は三角形を呈する。利用している土器片は、縄文時代後期堀之内式のものと思われる。

その他(第21図一5・6)

5・6共に素焼きの製品である。5は鳥を模したものである。6は



第13図 第1地点出土の土器実測図(1)

型作りで、合わせ目が明瞭に残る。塔を模したものである。5・6ともに江戸時代以降のものであろう。

(3) 石器

石鏃(第22図一1～5)

本地点からは、5点出土した。これらのうち、石材は1のみがチャートで、他はすべて黒曜石製である。基部形態を観察するとえぐりを有するもの(1～4)、えぐりの無いもの(5)とがある。

1は長身で扱りは深く、調整剝離は細かく丁寧なものである。2は先端部を欠損しているがえぐりは深く、側縁は弧状を呈する。3はU字状の深い扱りがあり、大きな脚部をつくりだしている。4は表裏に大きな剝離を残し、こまかな調整は見られない。えぐりは浅く、側縁もでこぼこで粗雑な製品である。5は他のものに比べて大形な製品である。全体の剝離は大まかで、厚みがある。

石匕(第22図一6)

黒曜石製で、器面は調整されず粗雑な作りである。つまみ部・刃部は、簡単に片面より剝離がなされている。刃部は刃こぼれによりでこぼこしている。

装身具(第22図一7)

本調査に先立って試掘調査を行った際に出土したもので、全体の2分の1を欠損している。中央に貫通孔が穿たれたペンダント状のものである。

スクレイパー(第22図一8)

チャート製で、扁平な剝片を用いたもので、下端部に両側から剝離を加え弧状を呈する刃部をつくりだしている。

打製石斧(第22図一9～11)

3点出土した。いずれも完形品。9・10は粘板岩製、11は砂岩製で、短冊形を呈する。9は側縁を表裏から丁寧に調整しているが、かなり使い込まれており、刃部は丸味を帯びて磨耗痕を明瞭に観察することができる。10は扁平な粗大剝片に荒い剝離を加えた後、片面から簡単に調整を加えている。刃部は表裏から剝離を加えてつくりだしている。11は粗い剝離を加えただけで、特別な調整は見られない粗製品である。刃部表面に磨耗痕が観察される。

粗大石器(第22・23図一12～15)

粗大な剝片及び石核を用いた石器を一括した。刃部は特別な調整は見られず、12～14は自然面を残している。12～15とも使用痕を明瞭に観察することができる。

横刃形石器(第23図一16・17)

2点出土した。16・17ともに粗雑な剝離を加えて整えており、自然面を残している。刃部は直線的で片方からの剝離によりつくり出されている。16は硬砂岩、17は凝灰岩質砂岩である。

磨石(第23図一18～23)

18～23は完形品で、23は欠損品である。22は欠損した礫片を使用したものである。18は上下面と側面も磨かれており、原形を留めず方形を呈する端整な形状である。19～21・23は上・下面とも磨かれて滑らかである。22は上面と側面の一部が磨かれている。

敲石(第23図一24・25)

考 古

24・25とも側縁に打痕を明瞭に観察することができる。両方とも上・下面が磨かれており、磨石としても機能したことが推察される。

凹石（第23図-26・27）

26は欠損品である。上面のみ浅い凹みを有する。上・下面とも磨かれて、磨石としても利用されていたことが推察される。27は完形品だが、火熱を受けて全面にひびを生じ、上、下面に凹みを有する。

その他、多数の剥片類が出土したが、層位的には第Ⅶ層中の出土が多く、平面的にはA・B-5～7グリッド付近に集中する傾向が看取される。

成果と課題

本遺跡の調査は、調査対象範囲が限定されていたために、遺跡の全貌を明らかにすることはできなかったが、この第1地点は、富士山より発し都留市十日市場小笹神社付近にまで達する十日市場溶岩の末端に位置し、溶岩の流出時期との関係も興味深い問題であったが、決定的な資料は得ることはできなかった。しかしながら、縄文時代前期諸磯B式の集石土壌に溶岩礫が認められ、かたわらに存在している十日市場溶岩を用いたのではないかと想像している。

<住居址>

本地点からは、4軒の住居址（第1～4号住居址）が検出された。これらのうち、第1・3号住居址は北側半分が調査対象地区外にあったため全容を明らかにすることはできなかったが、第1・2・4号住居址は円形プラン、第3号住居址は隅丸方形プランを呈するものであった。

住居址の時期は、第2・4号住居址が諸磯b式期、第3号住居址が藤内1式期、第1号住居址が堀之内1式期に、それぞれ属するものと思われる。

<土 壌>

本地点からは、8基の土壌が検出されたが、これらのうち、第2～8号土壌は円形プラン、第1号土壌は長楕円プランを呈し、断面形は第2～4・6・7号土壌がたらい状、第5号土壌が漏斗状、第8号土壌が不整形を、それぞれ呈していた。これらの構築時期は、第1・2・4～6号土壌が縄文時代前期諸磯B式期に、第7号土壌が縄文時代早期に、それぞれ求められる。

これら土壌の機能・性格については、明確に実証できる資料は残念ながら得られなかったが、第1・2・4～6号土壌の確認面、第Ⅵ層上面では熔岩礫群が広がっており、礫群と土壌との関係が注目される。とくに、第5号土壌においては、覆土上部に5～15cm大の熔岩礫による集石を伴っていた。また、第2号土壌では打製石斧・磨石などの石器、第4号土壌では砥石状の石が、それぞれ収蔵または設置されているかのような状態で認められた。これらも、この遺構の性格を考える上で、注目に値しよう。第8号土壌は、人為的に構築されたものではなく、いわゆる“風倒木痕”と思われ、縄文時代早期における植生を考える上で興味深いものである。

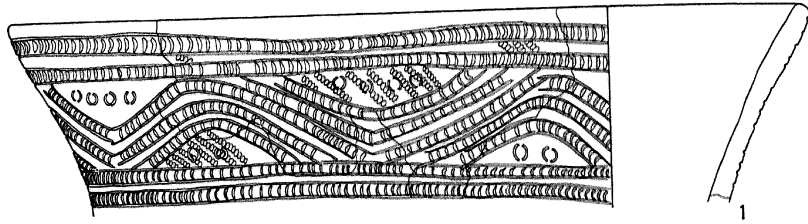
遺跡の現状

遺跡の上には、現在中央自動車道富士吉田線の上り車線が造られている。しかし、調査実施地区の

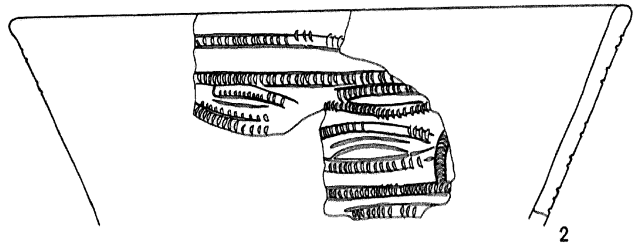
北側の畑まで、遺跡は広がるものと思われる。

文 献

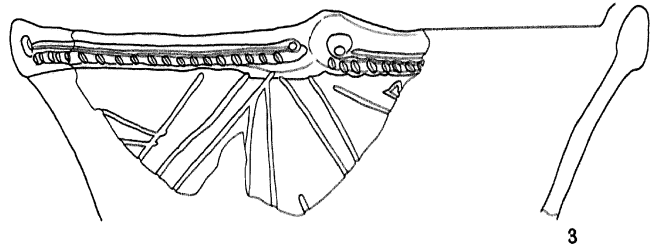
奈良泰史他『山梨原遺跡—中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う発掘調査報告書』都留市教育委員会1982



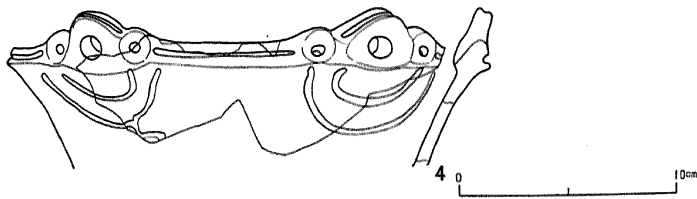
1



2

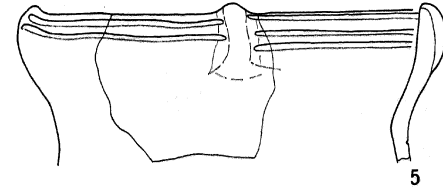


3

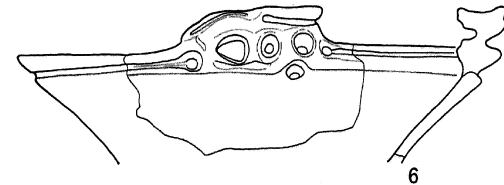


4

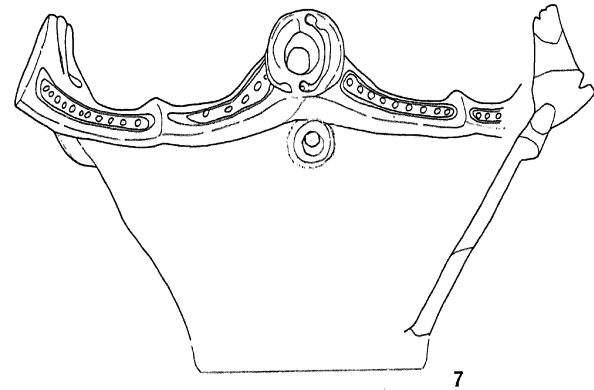
第14図 山梨原遺跡出土の土器実測図(2)



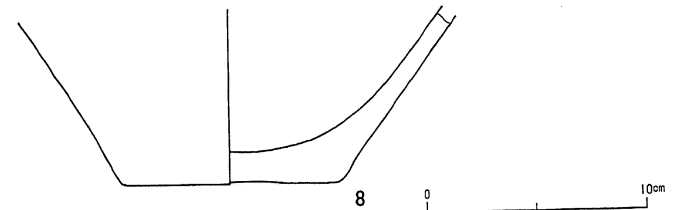
5



6

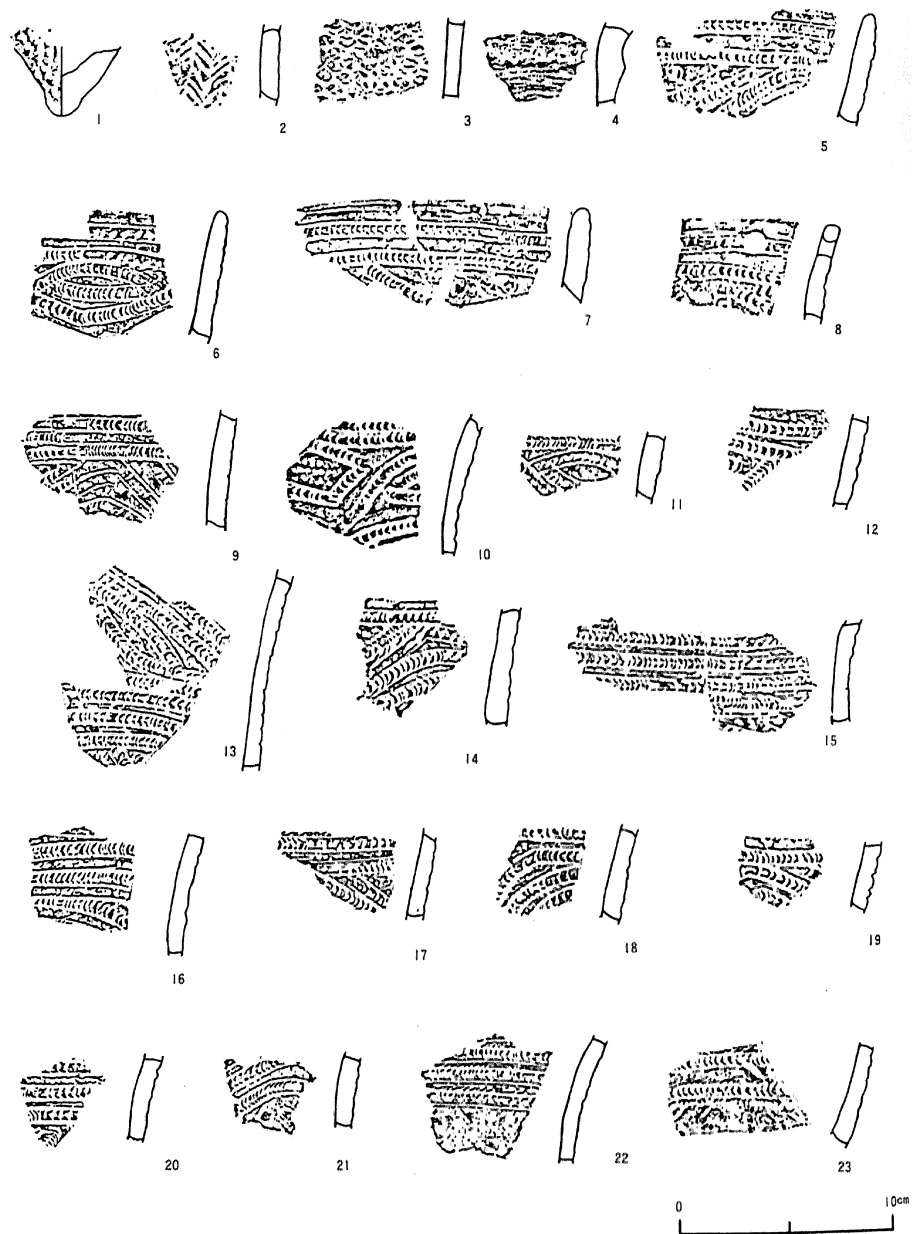


7

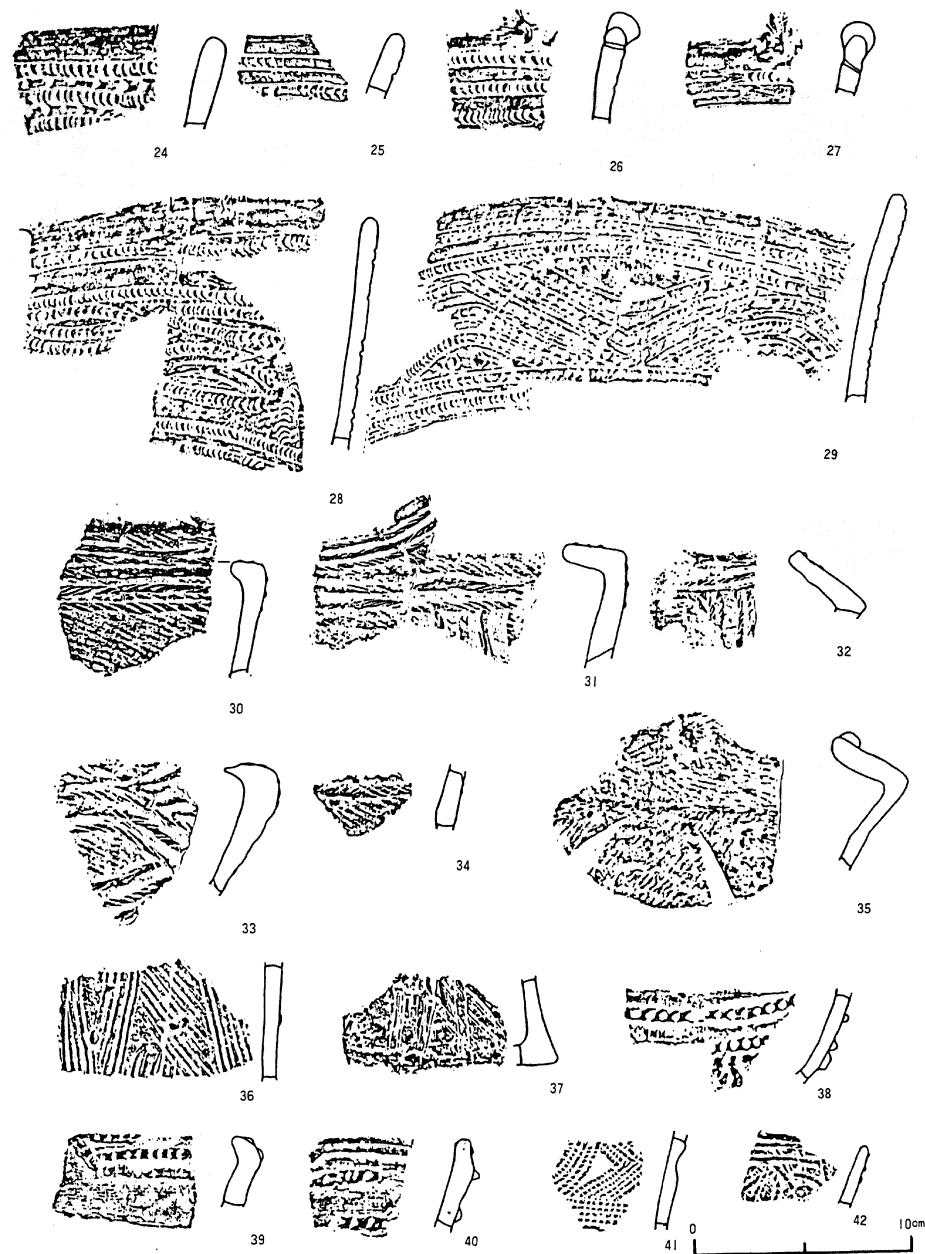


8

第15図 山梨原遺跡出土の土器実測図(3)



第16図 山梨原遺跡出土土器拓影図(1)



第17図 山梨原遺跡出土土器拓影図(2)